

なれどおをまた(?)と云人あり。余この種を施しぬ]も出生す。又色もいとよし。

小島鳥に品あり。ある人の云ふ、善千鳥、悪千鳥といふあり。それを「うとふ安方」のふた草とも云へり。又よな鳥は夜鳴鳥にや。一曲亭が記に出たり。一善鳴鳥にて善知鳥の誤にや。

又浦人の云ふ小島鳥に「繫、七里」とて二種あり、つなぎは烈しき鳥にて、嘴の辺りに鈎刺ありて、鯛などの小魚をさしつき持ちたくはへて喰ふといへり。七里は七里が灘もむれつゞきてあさるよりいへり。この七里は善知鳥にやといへり。その鳥の羽色は島鶺のごとく、腹白く、眼のあたりにも白毛七、八枚ばかりあり。嘴の上に雌の鶏冠のごとなる堅き紫黒色のものある鳥なり。善衛、悪衛とも云はゞ、いひてんものか。その実を知らず。又浦人のいはく、七里鳥にはあらず、ちちり鳥なりといへり。異国にては松子もちりちりと啼けり(?)。

千鳥の名ありてふ。宇登布も本千鳥の類鳥にて、善衛、悪衛といひ、窠にすめば空鳥の名あるにや。この鳥、津軽の外ヶ浜にいと多く浜田浦畑に佃りたる稲粟をふみつらし、群来て穴を掘りうがつてすめる。浦人これを愁ひて皇都に訴へまゐらせしかば、人多く給はりて、夜の内に網をはりわたし、年毎に此鳥をとらしめ、又窠を掘りこぼちて、雛と卵を皆捕しめ給ひしとなむ。暮れては海より帰るをまち、又夜深くも捕れば、水鳥の雫下、雨のごとくふれば蓑笠を着て捕るべし、そこを以て蓑を看て取るなども歌によめるにや。此窠鳥の夜深くおどろかれて鳴くを夜鳴鳥とも云ふか。

この鳥は水を離れて、七、八尺とは高くは得揚がらぬ鳥なり。鴨、鴛(*注*おしどり)、鴉(*注*かいつぶり)、味村のたぐひとは異にして、水のみぞありける。青菜鳥、をやふみ鳥、平家倒鳥、竜宮馬子鳥、曾我馬子鳥などいふ鳥も、いと高くは飛び得ぬ、かゝる類いと多し。青菜鳥は青菜と啼き、親踏鳥はけうららぬ子の親ふみしむくいにて、鳥となりても、脚のうしろざまにつきて、磯は得あるかぬ童の物語あり。竜宮の馬子も曾我の馬子も、いとやせたる小鳥なり。平家倒鳥は平

家の軍兵この鳥群立つ羽音を関の声と聞きおどろき、あはてふためき、海に落入り、陸に逃げ迷ひたる昔物語を伝ふ。

善知鳥を年々数多捕りて穴を掘りてつがね埋めて大塚にこめて、その上に祠を建て、鳥の霊を齋りたまひしとなん。その神社は元青杜とて、今の青森の里離れの田の中に、山の木とも、山の木林ともいふ所にありしを、この青森の里出来て、安方町の背に遷し奉りて、鳥頭明神とまをし、宗像の神を祭り奉るなり。

又安湯とは、出羽、陸奥に安の木(*注*サワグルミ)といふもの、わきて多し。その木ども岸に多くしげやありけん。この地にいといと大なる湖水ありて、その辺りに安の木多く生はたるより安湯てふ名におひ、その水に窠鳥はりけんかし。善衛社の旧跡なる山の木といふ所に、某の樹ならむやまくさ山拓[二、三種あり]の如くなる一本の木あり。安永(1772~1781)の頃は二本生えたりしが、風に一本吹きたをされしといふ。この木を山賤にとへば、山にても稀に見しことあれど、さだかこ名も得知らぬといひば、山の木とのみいひあへる。このあたりにては、一本うる木さへ、林といひ、又社家山伏の家を林といふと云々。

『東鑑』に、有多宇末井之梯とあるも、窠前にて、そは津軽の外ヶ浜の麻蒸の浦の秋津[蝦夷人の名なり]が窟の下に掛たり。窠前の梯といふを、しか訛いひしをそのままに記せるなるべし。今頭前梯と省語に呼びなせり。窠崎、空山、空坂、いと多し。うとう鳥は空鳥、安方は安木生えたる湖なり。よな鳥は夜啼鳥なり。善知鳥は瀬千鳥をちちりと誰いふを、字に当て作きつるにこそあらめ。猶考ふべし。

これで写本の文章は終わりである。宙外はこの写本を、「六郷に在住中、文雅の友と深く交際していたが、その密友の一人に書き与えたものだろう」としている。

次に真澄が引用した滝沢馬琴(1767~1848)の『烹雑の記』を紹介しよう。

佐渡ノ国雑太郡相川の鎮守を、善知鳥大明神と号す。〔天注、祠官市橋撰津〕神明、春日の両社、